

むつごろう通信

創刊号

2002年

1月30日発行

発刊のご挨拶

熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター長
内野明徳

有明海・八代海は、干満の差が大きく、潮位差は最大5メートル以上になります。沿岸の干潟の広さは日本の干潟の総面積の約6割にもものほり、そこには多くの特有な動物が生息しています。このように、有明海・八代海は世界的にも特異で貴重な海域です。そして、昔からノリや真珠の養殖、アサリやタイラギ等の漁場として大きな経済的価値を持ってきました。現在は、車エビやハマチ、ヒラメの養殖も盛んです。ところが最近、早急に解決しなければならない多くの問題が発生しています。水質環境の悪化、いろいろな生物や水産資源の減少、赤潮による養殖漁業の被害、台風による高潮災害などです。

時代の要請に応えるために、熊本大学は、平成13年4月1日に理学部附属臨海実験所を改組し、全学共同施設の「沿岸域環境科学教育研究センター」を発足させました。このセンターは、有明海・八代海を中心とした沿岸域の自然環境や社会環境について、基礎から応用分野までの教育研究を行います。その内容は、干潟域の生物や生態系の研究、水産資源の保全と新品種開発、自然と調和した沿岸域の保全・開発・防災など広範囲にわたります。そして、得られた成果を地元を提供することによって、より良い地域環境の保全と創造に貢献することを目指しています。国や地元の自治体・団体・研究機関などと



沿岸域センターの看板上掲式 (2001年4月5日)

連携しながら、熊本県における沿岸域環境科学の中心としての機能も果たそうと考えています。

このたび、海に関心のある県民・海洋や漁業の関係者・行政や教育研究機関など、多くの方々との交流を深めるために、センターニュースを発行することにしました。センターからの情報だけでなく皆様からのご意見や情報なども掲載し、親しまれるニュース誌に育つことを目指しています。ご支援のほどをお願いいたします。

(寄稿)

有明海、八代海の再生を目指して

熊本県水産研究センター所長
伊勢田弘志



熊本県は、有明海、八代海、天草西海と特徴のある3つの海に恵まれ、そこでは多くの種類の魚、貝、藻類などを対象に色々な漁業が営まれてきました。また、潮干狩り、海水浴、釣りなど県民の方の憩いの場所としても利用されてきました。

しかし、近年、アサリなど干潟生物の減少、海水の浄化や魚介類の子供達の育成に重要な役割を果たす藻場の減少、赤潮の多発などの海の異変に伴って、漁船漁業の漁獲量の減少や養殖漁業における歩留まりの低下、病害の多発などが大きな問題となっています。特に、昨年発生した赤潮による魚類養殖とノリ養殖の被害はみなさんの記憶に新しいことと思います。

これらの異変は、八代海においては養殖漁業に伴う環境負荷もありますが、総じて見ますと、埋立や海岸部の人工化など海的环境変化に加えて、山間部から平野部までの陸域で行われる産業活動や生活様式の急速な変化が川を通して海へもたらされた結果であると考えられます。海は大きな変化に耐えきれなくなっているのです。